三二五八番

あらたまの　年は来さりて　玉梓の　使ひの来ね
ば　霞立つ　長き春日を　天地に　思ひ足らは
し　たらちねの　母が飼ふ蚕の　繭隠り　息づき
渡り　我が恋ふる　心の中を　人に言ふ　もの
にしあらねば　松が根の　待つこと遠み　天伝ふ
日の暮れぬれば　白たへの　我が衣手も　通り
て濡れぬ

反歌

三二五九番

かくのみし　相思はざらば　天雲の　よそにそ君
は　あるべくありける